

「中国語学習嫌い」をつくらないための音声文字導入活動

中国語初学者にとってピンインのシステムを理解し定着すること、そして発音を合理的に体得することは言うまでもなく大事なことです。しかし、時にそれが中国語学習の障碍にもなっていることもあります。その大きな理由は、学習者にとって意味を伴わない「発声」を強いられることです。場合によってはどこがどう悪いのかも適切に示されなかったり、発音の仕組みをきちんと伝えられなかったりしたままの状態、「違う。もう一度。」と発声を繰り返させられることによって「中国語学習嫌い」を生み出してしまっていることも耳にします。

言語活動の中でストレスや音調を意識させる

言葉を声調や韻母、声母に分解し、その要素を理解しながら発音を練習すること自体は必要です。また声調から習得すべきという考えも共通認識になっています。(渡邊晴夫 2009)ただし、声調を ma などの単独の音でのみ練習していても言語学習と結びつきませんし、学習者を飽きさせます。また言語はある程度まとまった発話によって意味を持つものであり、ストレスや音調などは言語がセンテンスやパラグラフの単位において、それらを意識して練習しなければ体得できないものです。一つ一つの漢字の韻母、声母、声調が正しくても単語、フレーズ、センテンスとしては不自然になるということも生じてきます。できるだけ早く言語活動の中でストレスや音調を意識させたいものです。導入期で厳しく発音指導するのに、その後、ストレスやポーズなどプロソディについて指導しないことや、単に CD などの音声のまねを指示するのみにとどまることが散見されるのは残念なことのようによいます。

ピンインが終わらないからコミュニケーション活動をする時間がない？

年間指導計画の中を立てる際に、授業計画や達成目標に応じて、たとえば、交流校の学校訪問があるならその計画に合わせて、「〇〇市を紹介しよう」という単元を入れたり、中国に行く計画があるときは、「天津の古文化街で買い物をしよう」という単元を入れたりするわけですが、この作業の中で、ピンインや発音を教える、いわば「中国語の扉を開ける」イントロダクションとして使うことが可能な時間数を考えます。ある程度時間は必要ですが、ここにもコミュニケーション活動を含む内容をできるだけ入れるようにしたいものです。ピンインや発音の指導における説明や時間のかけ方は、指導現場の状況に合わせて考えていけばいいでしょう。このようにやらなければいけないというものから一度解き放たれて、それぞれの現場の生徒の言語習得に合理的なやり方を考えるようにしないと「ピンインが終わらないからコミュニケーション活動をする時間がない」という発想から抜け出せません。

発音の学習はある意味学習している限り続くもの

授業の中の指示や学習活動も中国語によって行うことによって生徒の学習達成感も強まると考えられます。たとえば「起立」などのあいさつを毎日違う生徒が行えば生徒の習得具合もわかります。もちろん、日頃の教室内での中国語による指示なども量を加減してかまいません。

学習者自身が規則性を考えたり発見したりできるように

発音の学習はある意味学習している限り続くものです。韻母や声母などの「部品」を完璧にしてからでないと次に進まないというのではあえて脱落者を作り出すようなものです。「規則をたたき込んで、読めるようにする」道筋もありますが、むしろ、たくさんの単語・言葉・フレーズに出会って、学習者自身が規則性を考えたり、発見したりできるようになると教師から一方的に教わるのではなく、考えも深まるように思います。勘のいい生徒は漢字の読みにある程度の規則がある（例えば、「村」「本」など「ん」で終わるものはピンインは n で終わること、「坊」「房」などつくりが同じものは発音も近いなど）ことにも気づくかもしれません。そんなところから興味関心を広げてもいいでしょう。言葉の仕組みの習得も少ない段階でいろんな単語に触れるものとして次のような活動が考えられます。

クラスメートやよくみる名前を活用してみる

「相手の名前を尋ねたり、自分の名前をいうことができる」という目標の單元の中で、まず、四声練習をかねて、中村 (1+1), 高橋 (1+2), 山本 (1+3), 阿部 (1+4), 田中 (2+1), 吉田 (2+2), 橋本 (2+3) 鈴木 (2+4), 小川 (3+1), 佐藤 (3+2), 久保 (3+3), 井上 (3+4), 渡辺 (4+1), 后藤 (4+2) 上野 (4+3), 木下 (4+4) のようにクラスにいらなくてもよく見る名前を使って練習してもよいでしょう。できるだけたくさんの文字に触れさせるために日本人の氏名ベスト 100(ネットにはたくさんあります。文字があまり重複しないように、名字も名前も多い順に並べて作れば毎年使えます。日本人は中国人に比べて姓が多いのはなぜだろうと考えたりするのもおもしろい)などのような資料を作ってどんどん読んでいく。生徒の氏名も教師が単純に教えるのではなく、その練習の中から自分の字を見つけて読めるようになる。クラスメートの名前も同様にみんなで言えるようにし、“他姓什么? ”、“她叫什么名字?” とテンポ良く質問をしていけばたくさんの量を発音できます。普段は席の離れているクラスメートとのアイスブレイキングにもなる活動も想起できるでしょう。友だちの名前は忘れないものです。

歴史上の人物や有名人の名前を活用してみる

その後は、歴史上の人物や有名人を絵や写真で示して、“她是谁? ”、“他是哪国人?” と質問していくと、同じ文型でたくさんの語彙を使うことができます。ベートーベンはどこの人なのか、漢字でどう書くのかなど関心は広がるでしょう。韓国の人を取り上げれ

ば漢字の読みについて中国語・韓国語・日本語と比較ができます。ルイ十四世などを取り上げてもおもしろいし、孫文、毛沢東など中国の近代史に触れることもできます。その時の中国の主席やアメリカの大統領を取り上げると時事的な内容にも興味を広げられます。中国でも人気のある漫画の主人公を使うのも興味を引くでしょう。こうしているうちに自然と声母や韻母はほぼすべてカバーしています。時折振り返ってポイントやピンイン綴りの法則などをまとめてあげたり、集中的に練習したりすると効果的でしょう。

少しまとまった提示的コミュニケーションを取り入れる

ここまで来れば、少しまとまった提示的コミュニケーションを行うことができます。自分の身近な地名や人名を織り込めばまとまった自己紹介や自分の県や市について発表できるものです。提示的コミュニケーションの取り組みやすいところは、1)自分であらかじめ十分に練習できること。2)発表したことを個別に評価しやすいこと。3)初期の学習者にとっても達成感が強いこと。などが挙げられます。加えて、その発表の発音の良かったところ、直して欲しいところを指摘できる点も初期において見逃せないメリットだと思います。ここを直せばもっと良い発表だったという気持ちになれば、良い発音にしようというモチベーションを持って授業中取り組めるはずです。このような自覚を持たせることは発音矯正において大事な点だと思います。

練習するペア同士やグループの中でお互いの声調を直し合うような雰囲気を持てるのも初期の頃ならではです。余裕があれば自分の発表のビデオを見て自分の発音を振り返るような機会を作ることも考えられます。